

聖書講筵 京都伝道集会（1）

わが心定まれり

――詩篇第57篇――

1974年5月3日

小池辰雄

我をあわれみたまえ 汝はわが避所 「一つ」の世界 未完成の完成 神の根源語 一切の秘訣
わが心定まれり キリスト一点張り われ黎明を呼びさまさん キリストだけが当てになる
キリストは最善を成し給う

【詩篇57】

ダビデが洞^{ほら}にいりてサウルの手をのがれしとき詠^よみて「ほろぼすなかれ」
という調^{しらべ}にあわせて伶長^{うたのかみ}にうたわしめたるミクタムのうた

1 我をあわれみたまえ

神よわれをあわれみたまえ

わが靈魂^{たましひ}はなんじを避所^{あきつこころ}とすわれ禍害^{わざわい}のすぎさるまではなんじの翼^{うし}のかげを避所^{あきつこころ}とせん

2 我はいとたかき神によばわん

わがために百事^{すべてのこと}をなしおえたもう神によばわん

3 神はたすけを天よりおくりて

我をのまんとする者のそしるときに我を救いたまわん

4 わがたましひは群^{ぐむ}いる獅^しのなかにあり火のごとくもゆる者その齒^{はこ}は戈^{ほこ}のごとく矢のごとくその舌はとき劍^{けん}のごとき人の子のなかに我ふしぬ

5 神よねがわくはみずからを天よりも高くし

みさかえを全地のうえに挙げたまえ

6 かれらはわが足をとらえんとて網をもうく

わが靈魂^{たましひ}はうなたるかれらはわがまえに阱^{あな}をほりたり

而してみずからその中におちいれり

7 わが心さだまれり神よわがこころ定まれり

われ謳^{うた}いまつらん 頌^{たた}えまつらん8 わが栄えよさめよ 箏^{そう}よ琴^こよさめよ

セラ

セラ



われ黎明^{しのめ}をよびさまさん

9 主よわれもろもろの民のなかにてなんじに感謝し

もろもろの国のなかにて汝をほめうたわん

10 そは汝のあわれみは大いにして天にまでいたり

なんじの眞実^{まこと}は雲にまでいたる

11 神よねがわくは自からを天よりも高くし

みさかえ
光栄をあまねく地のうえに挙げたまえ

●我をあわれみたまえ

奥田先生の周到なご用意によりまして、明日の講演会の前の晩の第1回の集会をここに皆さんと、親しい皆さんと持てるのは非常にアット・ホームな感じですが、今、奥田さんの言われたように、なかなかお一人お一人はのつびきならないいろいろな現実を乗り越えて来られたと思う。それで今晩、どこをやるうかなと思って、久し振りで詩篇をやるうと思つて、今日の午前あつちこつち読んで、三つくらい候補者があがつたんですが、その中からこの57篇を最終的に選んだわけです。例のごとく何にも準備してないので申し訳けないですが、私が何か選ぶ時に、二、三回じつと読むんです。そして、ある一つの句にぶつかつて、それがある焦点になると、もうそれで他のことはどうでもいい。一つの焦点がつかめると、正にこの「心定まれり」となる。今日の焦点はその

「心定まれり」

というところです。

サウロは、サムエルに按手されて神の霊が伝わった時には、手当たり次第に何をやってもいいと言われて、だいたい初めは、御霊の導きのままに動いていたようですが、そのうちにダビデという優れた家来に対して――いろんな意味において人間的にどうもダビデの方が優れていたらしいので――うっかり妬みの心が湧いたとみえて、ちょうど頼朝が義経を追いかけるように、サウロは少し気のおかしくなつたサタンの霊にすり変つてしまった。ダビデの方は忠実ですから、やつつけようと思えば反逆――「敵は本能寺にあり」ができたんでしょけれども――それをやらないで逃げ回っている。これがダビデのまたダビデであるところですが。サムエル前後書を読むと、実にドラマチックな展開がしてあります。

ダビデが洞^{ほら}にいらりてサウルの手をのがれしとき詠^よみて「ほろぼすなかれ」と

いう調^{しうべ}にあわせて伶長^{うたのかみ}にうたわしめたるミクタムのうた

そういう見出しで、そういうったことを背後に考え浮かべながら読んでみても差し支えないと思う。しかし、学問的には果してこの見出しが正しいか正しくないかは、これはだれも決定することはできない。

「我をあわれみたまえ」



神よわれをあわれみたまえ
わが靈魂^{たましひ}はなんじを避所^{やけふところ}とす
われ禍害^{わざわい}のすぎさるまではなんじの翼のかけを避所とせん
第1節は素晴らしい1節です。これはもう、人生はこれで行けばいい、といつてもいいくらいです。

「我をあわれみたまえ」

というこの叫びは、人間の一番深いところにある叫びである。人間は誰でも手放しでは立てない。また、勝てない。これはサタンにやられる。どうしても神の憐れみ――言い換えると神の救い――神の憐れみ、神の救いを必要としないひとと一人もない。もしそういう「神の救いを必要としない」ことが言えるとすれば、とんでもない傲慢である。ところが、そういった人間の失われたる、いわゆる放り出された存在、寄るべき存在、そのことに本当に気がついていないわけです。皆そういった現実を他の事でもつてごまかし被っている。

誰でも死に面しているところの存在ですから。それは人間は死にうち勝てない。罪にうち勝てず、死にうち勝てない、この我々が神の憐れみなくして、神の救いなくして、ありようはずがない。だから、

「我をあわれみたまえ」

というこの叫びは一番、私たちの本質的な叫びであるはず。それは率直にそうです。平伏^{ひれふ}しの魂^{たましひ}というのは、この叫びをうちに持っているわけです。神さまの前に平伏さざるを得ないんです、本当は。ちょうど子供みたいなので、3歳の童児がお母さんの助けがなければどうにもならないというわけです。

● 汝はわが避所

「我をあわれみたまえ」

神よわれをあわれみたまえ

わが靈魂^{たましひ}はなんじを避所^{やけふところ}とす

この詩篇は「エホバは」とか「彼」という三人称でなくて、みな二人称と一人称で云っている一番詩篇らしい詩篇です。だいたい信仰の世界というのは一人称と二人称の世界。「汝―我」の世界、また「汝―我ら」の世界です。

「我は汝を避所とする」

と。そうですよ、力が無いんだから、そして、どうにもならないんだから。

「あなたの中に隠れなければ」

と。「隠れ場」。ドイツ語の Herberge^{ヘルベルゲ}〔宿〕という言葉がありますが、正に「隠れ家」。あなたを避所^{やけふところ}とする。この「避所」というのは、言うまでもなく詩篇の中にはちよいちよい出



てくる。有名な詩篇46篇がそうですね。

「苦しめるとき^{いと}の最^{さい}ちかき助けであつて、^{やけあし}避所である」

と。逃げ場とする。

「なんか信仰の世界は意気地がないんだなあ」

と、こう思うわけです。ところが、我々にとってこの逃げ場は、避所はキリストであります。キリストの中に隠れる。キリストの中に隠れると、弱いやつが今度は強くなる。強くされる。隠れっ放しでただおしまい、というんじゃない。キリストの中に隠れると、知らないまにそこに力が来る。

「われ禍害^{わざわい}のすぎさるまではなんじの翼のかげを^{さけどころ}避所とせん」

キリストが牡鳥の翼の蔭に、

「お前たちをそういうように私は囲もうとして、私自身を避所としてやろうと

思っているのに、一向ダメじゃないか」

と言って、エルサレムの市民に、エルサレムをオリーブの山から見られて、嘆かれた有名なところがありましたね。だから、なんじの翼の蔭を避所として、

「禍害^{わざわい}のすぎさるまで」

と。これは詩篇を作った作者は確かに敵に追われて、追跡が終ったという時までは、ほら穴の中に隠れていようと、

「あなたはほら穴ですから」

というわけです。けれども、人生で、「禍害^{わざわい}が過ぎ去るまで」とは、いつ過ぎ去るんですか。禍害は過ぎ去ったかと思うとまたやって来る。でありますので、「この世にある限り」と同じことです。現世にある限り、地上にある限り、禍害はいつでも臨んでくる。だから、「禍害の過ぎ去るまで」というのは、

「地上の生涯果てるまで、あなたを^{さけどころ}避所とします」

ということとは、もうひとつ言えば、禍害が有ろうが無かろうが、常に避所とする。いつも逃げてしまう。仕様がないうつですね。それをいつも逃げていると、

「あいつはしょつちゅう隠れていて何もしないではないか」

なんて。ところが、キリストという隠れ場は、動的な隠れ場であつて、決してほら穴ではない。イエスという方は、

「今日も明日も次の日も進み行くなり、神と共に我は働くなり」

という。キリストは常にサタンに打ち勝ちつつ、進み行くところのキリスト。この常勝將軍であるところのキリストを避所とするというのですから、言い換えれば、キリストに直結していくと、キリストに直結するところの、キリストを剣^{つるぎ}となし矛^{ほこ}となす。マルチン・ルッターの宗教改革の歌みたいです。「守るも攻むるも鋼鉄^{くろがね}の」「軍艦マーチの歌詞」じゃないが(笑)。



「守るも攻めるも、これはキリストだ」というわけです。

そういうようにこの詩篇を私たちは御霊の光で読んでいく。そして、「翼のかげ」とか、あるいは「翼の上」という言葉が申命記の32章に出てますが、

「翼に乗せてお前たちを自分は導いたんだ」

と、ヤーヴェーの神がイスラエルの民をエジプトから出して、荒野の旅を行くということを、そういうように彼はたとえた、モーセの歌に有名な句がある。あのように、聖霊の翼、聖霊の翼のかげです。

そうすると、キリストに隠れるということは、言うまでもなく、さつき「力が来る」と言ったのは御霊の力です。キリストのところに来なければ、御霊の力は来ない。しかしながら、福音書ではペテロもヨハネもヤコブも、キリストのそばにいました。けれども、力は――それは一時的には来たこともあるけれども――本来に来なかった。それはキリストも知っていたらつしやる。それは申すまでもなく、十字架というバプテスマ、贖罪の血をキリスト自身が流すまでは、聖霊の臨在ということが本式にならない。御霊は、十字架のキリストの中に、十字架の門を通して入っていけば、必ずそこには御霊が臨んでくださる。こういう角度から、私はこの詩篇57篇の第1節を読むわけです。

●「一つ」の世界

2 我はいとたかき神によばわん

わがために百事^{すべてのこと}をなしおえたもう神によばわん

これは大事な句ですね。

「わがために百事^{すべてのこと}をなしとげたもう」

ここに「わがために」と書いてあるけれども、もうひとつ突っ込んでみると、

「我を通して百事をなしたもう」

と。キリストというひとは、イエスという方は、

「どうぞ、あなたの聖意を成してください。どうぞ、私を通して」

と、彼はいつも挺身していました。投げかけていました。何も考えないです。もうバカみたいになって、一切、全身全存在をキリストは神さまに、父に投げかけている。

「さあ、どうぞ、お使いください」

と。そうしたら、神さまは自由自在に使う。だから、いつも申し上げている通り、キリストは、

「私は何も言えない。何もできない」

と、誠に無力無為なひと。老子の無為の哲学があるけれども、老子の無為の哲学よりかキリストの無為の信仰の方がもっと強い無為。もう私は行きつくところ、「無」の他にないん



ですよね。何も無いという世界。そうすると、我がためにすべての事をしてくださるし、我を通して、また我に在つてともいつていい。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

とパウロが言った。「一つ」になっている。最後の世界はみんな「一つ」の世界です。

さつき私は、この詩篇は「汝と我」と云いました。けれども、

「汝と我」

というものをいつまでも相対的に意識しているうちはダメなんです。マルチン・ブーバーがいくら言ったってダメだよ。ブーバーがあんなことを言うのと、みんなそれで「そうだ、そうだ」なんて言って、やっている。ブーバーに囚われている。ブーバーに囚われてはダメですよ、キリストに囚われなくては。「汝と我」という、汝と我が今度は一つになって、

「汝か我か分らない」

という、

「我は汝なり、汝は我なり」

と。本当ですよ。そういう図太い世界に入らなかったら……（異言）……、力が来ないです。これは絶対恩寵です。観念でただそう思ったってダメですよ。絶対恩寵というのはそういう一つの世界ですから。

「こつち側がどうである、こうである」

ではない。どうしてみんないつまでも、「こつち側はどうだこうだ」と、自分の実存ばかり見ているんですかね。私は正直、ダメな野郎ですよ。けれども、これはすつ飛んでいるんです。もうすつ飛んでいるから、私はこの伝道みたいなことをやっている。これは「みたいなこと」で、本当の伝道ではない。私はすつ飛んでいる。だから、私は楽なんです。皆さんもどうぞ楽になつてくださいよね。

こつち側から力^{りき}み立ったって、それはくたびれますよ。まあ始めは力んでもいい。そのうちにくたびれて、

「よし、それではどつかりと腰を据えて、ひとつ楽になりましょう」

と、キリストの中にどつかりと腰を据えてしまふ。腰もすわらなくて倒れてしまっている。倒れればいい。倒れれば起き上がらせてくださる。あなた方はいろいろ疲れたりなんかするね。祈りなさいよ。坐つて祈れなかったら、寝て祈った方がいいよ。

いつか僕は映画で見たんだけど、ある場面でカトリックの尼さんが十字架の姿になつて寝て祈っていたよ。僕はパツときたね。デューラーの、キリストがゲッセマネの祈りの時に地上にうつ伏して祈っている、あの絵が僕は大好きなんだ。カトリックの尼さんがそういうようにして祈っていたから、これはやっぱりカトリックの世界にはいいところがあるなあと思った。カトリックだって、プロテスタントだって、何だって、そんなことは私は区別はしない。どうして、ああみんな区別するんですかね。本ものがあつたら、何で



もピシャツと見ればいいじゃないですか。そういう無心の状態にならなければ、真理はダメですよ。そういうところに入っていく。何にもない。

これが「一つ」の世界です。キリストは「一つ」の世界をちゃんとくださっている。あの中世の神秘主義みたいのにキリストの十字架ぬきの、贖罪ぬきの「一つ」は危ないよ、へたすると。時々そういうった霊的状态に入ろうと思って妙な祈りをする人があるらしいが。私は、あなた方にはそういうことを心配しない。無教会が「十字架」なんて言っているよりかはるかに凄い十字架の世界を捉えているから。これはパウロさんが福音の世界で本当に、

「もう十字架のほかは語るまじと心を定めた」

なんて言っている。その彼はそこに徹した時に今度は、

「御霊の他は言うまじと思う」

という言葉はないけれども、それくらいの展開をしているんです。十字架と御霊はもうピタリ一つで離すことができない。それならば絶対に、いくら「聖霊」と言っても大丈夫。十字架の土台なしの聖霊は危ない。へたするとサタンの霊にひっくり返る。霊的傲慢というやつが一番悪いんだから。イエス・キリストはあんな素晴らしい霊人であるけれども、ひとつも霊の事態を私しなかった。いつも、

「神さま、あなただけです」

と。ゲッセマネでも血の滴りをするような祈りをしていらつしやる。人間の弱さをそのまままむき出している。そうですよ。ルカ伝のあそここのところを読んでごらん下さい。深刻に書いてある〔ルカ22・39〜46〕。いいんです、それで。何か、信仰というのは、出来上がったものじゃないですから、ひとつも。出来上がらない破れの姿、破れ砕け、そこに物凄いのが望むんです。

「何か私はまだ霊的に気持が澄まないし、どうも分裂するし、困ったものだ」

なんて。いつまでそんなことをやっているんですか。よしませう、そんなことは。電光石火！ その世界に入る。

祈りなんていうものは、黙って祈っていて凄い世界に入る。私は今朝、床の上で祈っていて、もう霊的状态になって、危なく異言が爆発しそうになったよ。こらえた。本当に十字架の前に平伏してごらん。そうしたらば——もう表現できないです——それはもう叫んだら、物凄い叫びが出る世界です。けれども、沈黙の雄叫びという、静中の動という、火山の爆発する寸前みたいな静けさです。

●未完成の完成

2 我はいとたかき神によばわん

すべてのこと

わがために百事をなしおえたもう神によばわん

「わがために」なんていうと、少しズレてしまうんだよね。



「我と共に、我に在りて、我を通して」

と、どこまでも密着してくださいよ。「ために」なんていうと、少し観念的にズレる、ヘタすると。それ自体が目的、存在。何か特別に目的があるのではない。

だから、困っちゃうんだよ——困りはしないけれども——聖書を読みながら、聖書の奥の世界に來ちやうんだから、御霊は。そうすると、

「小池なんてやつは、あれは聖書を勝手な読み方をする」

と、そう言うんだよね。いいよ、何と言われても、私は。

「御霊は限りなく神の奥義を知らせる」

と書いてあるじゃないですか、コリント前書に。

皆さん、一人ひとりどしどし行くんですよ。だから、私が語っているのも、あなた方が聴いているのも、同じ事です。私は何にもあなた方を教えているのではない。ただ勝手にものを言っている。そういうわけです。

すべて成し遂げてくださる。どんなに未完成でもいい。遂げるんです、必ず。地上では未完成。いいですよ、未完成の完成という。未完成の方がずうつといいよ、余韻があつて地上で完成してしまったのでは面白くない。

「もうお終いか、その先どうなんですか？ 後編は如何？」

なんて。後編はその次の世界にたくさんある。昔の活動写真というのはそうだった、

「これで前編の終り、後編のお楽しみ」

なんてね（笑）。後編のお楽しみは次の世界。どうぞ、皆さんはこの未完成の靈止^{ひと}になつてください。三日月です。

今日は半月が出ている。半月は満月に成ろうとしている。満ちつつある月はドイツ語でツォーネーメンデル モーント Zunehmender Mond といつて、こういう形「イタリック体の Z の字のように右側が弧になつている形」をしていたら必ずこの月は満ちる。欠けていく月は、アッブネーネーメンデル モーント Abnehmender Mond といつて、こう「イタリック体の A の字のように左側が弧になつている形」なつていたら、段々欠けていつてなくなつてしまふ。私みたいな頭の悪いのもこういうので覚えてる。我々はこの満ちつつあるところの月と同じように、人生は三日月であろうとも、四日月であろうと、五日月であろうと、十日月であろうと、いいよ。一日月でもいいよ。非常にきれいだよ、一日月なんてのはスーツとしてね、女の人の眉毛みたいなもんで。柳眉なんていうけれども、何ていうんだろかなあれ、一日月眉毛なんて（笑）。女の人の眉毛をみたら、そういう真理を見つけないてはいかん。あれは今に満月みたくまん丸になるんだと（笑）。まあ冗談ばかり言つて困る。漫談みたいで。

成し遂げるんです。未来完了です。未来完了を現在において既に受けとる。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

と、キリストは言つたではないですか。



「まだ聴かれていないが、これは果して聴かれるのだろうか？」
なんて祈っているうちに聴かれなくなるよ、そんな疑っていたら。

「いよいよ現実は行き詰まったが、もうこの辺で神さまに祈るのはよそう。もうキリスト教はやめて、仏教に入ろう」

なんて(笑)。困りますよ、それは。「キリスト教」――「教」なんて私は嫌いなんだ。「キリスト道」です――キリスト道ほど図太い世界はない。信仰というのは100%の世界なのでね、99%もダメなんだ。100%なんだ。だから、キリストは言われたでしょ、

「父の全き^{まった}が如く全かれ」

と。「父の全きに似た99%になれ」なんて仰らない。「全きが如く全かれ」と言う。これは不可能です。福音は不可能を要求する音信なりと。これはもう一番――あなた方に時々、試験してやろうかな(笑)――そういう答案を書いたら、私は満点をやるよな。

「福音は不可能を要求する音信なり。それが故に可能なり」

と。本当にそうですよ。不可能なるが故に可能なんです、それはキリストが来るから。

「私を受けとらなければ、どんなことも不可能だよ。我に由らずば何事もなし

能わず」

と、ヨハネ伝にある通り。ということは、

「我によれば何事もなし能う」

ということですよ。ヨハネ伝の15章に書いてある。あなた方、聖書を精読してくださいよ。

「もう私は聖書は要りません。新約聖書は要りません。みんな頭に入っています」

なんてな人があったら、大変結構です。とにかく、むきにならなくてはね。これも無だ(笑)。いいですか、冗談をいいながら本当の事を言っているんですから、間違わないでくださいよ。

●神の根源語

「一切を成し遂げ給う」

という。だから、もういいじゃないですか、人生どこでお終いになっても。

「ああ、もう私の人生は失敗だらけ、何にも出来なかった」

いいよ、それで。神さまはちゃんとそれを完成してくださるから。どうして、みんな計算するんですか。算術なんかゼロでいいよ。

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

になるから。

3 神はたすけを天よりおくりて

我をのまんとする者のそしるときに我を救いたまわん

「たまわん」と書いてあっても、「たもう」と読んでください。ヘブライ語の文法なんて、あれはいい加減と言っては悪いけれども、非常に弾力性がありますから。日本語で「たまわん」



なんて書いてあったって、それはいくらでも「たもう」と訳して一向差し支えない。誤訳でも何でもない。

「天よりおくりて、我を救いたもう」

と。信仰は現在だからね、未来を現在化するんだから。未来を現在化し、過去をまた現在化する。信仰の世界は、過去をも、未来をも、全部現在化する。本当に現在化すること、永遠化することなんです。現在において永遠を掴む世界なんです。

あんまり言うのと、明日、明後日の事をみんな言ってしまうから、まあこの辺にしておこう(笑)。ゲーテが、

「あまり言つてはいけない。真理の大事なところは残しておけ」

なんて言っているからね。

「天よりおくりて、我を救いたもう」

と。よく、ヘブライ語を一生懸命で勉強して――「勉強するな」と言うのではないよ、勉強してください、いくらでも――それから、ギリシヤ語を勉強して、

「このところは原文ではこういうことで、本当はこう読むべきで……」

なんてな解釈をして得意になっているのがあるよ。悪くはないよね。けれども、それもやっぱ言葉に囚われている。私はギリシヤ語だってヘブライ語だって多少読めるけれども、そんなことはいいんだ。もう御霊の世界に來ると、この日本語の不完全な訳で一向差し支えない。その先をどしどし読んでしまうから。あなた方もいいですよ、そんな語学なんかできなくても。

「われ語学ができないことを誇りとするなり。何となれば、御霊が臨んで来るがゆえに」

と。そういうようにしてやってくださいよ。本当ですよこれ、楽しいですよ。しかし、できる人はいくらでもヘブライ語、ギリシヤ語をやってください。

「なんだ、このヘブライ語は大したことないな。ヘブライ語でせいぜいこんなことしか言えなかったか」

なんてなわけだね。神さまの根源語はヘブライ語でもギリシヤ語でもない。

「根源語」
ウルヴァオルト
(Ur-Wort)

というのは。神の霊言というのは、音楽みたいなものだ。どの国の言葉にも翻訳できる。音楽をやっている人はどうぞ大いに自信を持ってください。言葉ならざる言葉の世界です。

神はその憐憫あわれみその真実まことをおくりたまわん

「おくりたまう」ということ。「いつくしみとまこと」あわれみ「憐憫と真実」というような言葉が出てくるね、ヨハネ伝にも。それは

「愛と義」

と言つてもいい。「まこと」という字は「真しん」ですから、信仰の「信」と同じですから、



「愛と信」

と言つてもいい。むしろ「信」の方がいくらいです。「アーメン」という字だからね、もともと「エメス」というのは。神さまの言には二言なし、必ず実現するんです。本当の言だから実現する。実言は実現するんです。愛は救いと同じこと。「愛する」というのは「救う」ことなんだ。

「私はあなたを愛します」

というのは、

「私はあなたを救ってあげますよ」

ということ。感情的に「好きだ、嫌いだ」ではない。

「よし、助けますよ、荷いますよ」

とね、それがこの愛の世界です。

アガペーだのエロースだのと、難しいことを言わなくなつていいんですよ。救うということ。アッシジのフランシスとか、サンダーシングとか、法然とか、親鸞とか、みんなそういう境地です。それから、蓮月尼という尼さんがいたね、それから信州の良寛さん、ああいうのは皆その境地です。そうなつたら、無一物無尽蔵という境地。パウロさんもそうです。

●一切の秘訣

「富めるにも、無きにも、貧しきにも、何にも一切の秘訣を得たり」

という。『一切の秘訣』という本をそのうちに書きますから。まあ空約束しない方がいいな(笑)。

「先生、いつ出るんですか？」

なんてね。〔註：第14回夏期福音特別集会（1967年8月25～27日）「ピリピ書」を主題にした曠愛新書第7号『一切の秘訣』は結局未刊となった〕

神は愛と信(真)とおくつてくださつて、私たちを愛と信(真)のひとにしてください。どうぞ、聖書の言葉を徹底的に読んでくださいよ。力になるまでは止めない読み方をしてください。

「これはどういうことだろうなあ？」

なんて、頭で分析したら分からなくなる。聖書の読み方というのは、こんな私みたいな乱暴な読み方をするやつは、あるかと思う。ところが、私は御霊で分るんです、はつきり。

「そうだ、そうだ。よく読んでくれた」

と。そして、私はあなた方にこうやって告白していれば、あなた方も同じ世界に入って、楽しくってうれしくって、力が来て、しょうがない。聖書は力を与える世界だもの。

「福音は言葉にあらず、力なり」



と、パウロが言った。どこを読んだってそうなんです。何も詩篇57篇を私は選ばなかったってよかった。ここに立つてからパラパラと開いて、そこをやったって構わない。本当ですよ。だから、私は祈禱会の時に、「さあ、どこでもいいよ」と言って、あなた方が言ってくれたところをやるでしょ。どこであろうと差し支えない。聖書は御霊をもつて書かれた本だから。

4 わがたましひは群いる獅のなかにあり火のごとくもゆる者
そういつた燃ゆる人の子の中に伏している。

その齒は戈のごとく矢のごとく

その舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ

傲慢な、人をねらう野郎に、餌食をねらっているやつにやられている。確かにそういう現実をここに語っているわけです。

私はむしろやっぱりこれはダビデの作と思っていと思う。学者というのは、すぐ

「これは誰だ、彼だ」

なんて言う。率直に受けとつたらいいよ、「これはダビデの作だ」とね。

「結局、本当はそうだった」

なんて、あとになって発掘や何かでもって分かってみると。ノアの方舟なんてのもみんなそうなんだ。

5 神よねがわくはみずからを天よりも高くし

みさかえを全地のうえに挙げたまえ

いきなりこんなことを言っている。何か辻褄が合わないようだね。

「ねがわくはみずからを天よりも高くし」

もちろん神さまは天よりも高いですよ、天地創造された方だから。

「みさかえを全地のうえに挙げたまえ」

壮大な神さまに向かつて。だから、この作者はなかなか氣宇の壮大なやつです。ダビデはそうだよな。

6 かれらはわが足をとらえんとて網をもうくわが靈魂はうなだる
どうも危なくしょうがないからどうにもなりませんと。

かれらはわがまえに阱をほりたり

而してみずからその中におちいれり

これは、人を陥れようとすると、自分が落っこちる。諺みたいなものだ。

「どっこい、自分で落っこちたりしますよ」

というわけだ。

●わが心定まれり

7 わが心さだまれり神よわがこころ定まれり



われ謳^{うた}いまつらん 頌^{たた}えまつらん

これを今日の表題にした。ヘブル書13章に、

「キリストは昨日も今日も明日も永遠に変わらない」(ヘブル13・8)

とあった。キリストは不動心の霊止^{ひと}ですね。お不動さん。

「わが心定まれり」

というのは、ある瞬間的な決意だね、その言葉それ自身は。

「決意しました。はつきり決まりました、結婚しよう」と

そうじゃないよね(笑)、若い人がいると、そういうようなことを私は言いたくなる。そうじゃない。結婚しようとしまいと、それはどっちでもいいよ。そういう問題じゃない。

「わが心定まれり」

とは一体どういうことですか。あの人だと思ったら、こっちの人になってみたり、いろいろなことになる。こっちに行こうと思つたら、あっちに行こうとしたり、なかなか定まらなくて、クラゲみたいにフラフラしている、風船みたいに。

「どうも定まらなくてどうにもなりません」

といって、その流動的な動く心。これにもう愛想を尽かして自分を投げ出してしまつて、

「キリストさま、あなただけです」

と。もう自分の心なんか、決心なんか、決意なんか――あの「決意カード」なんかやるね、伝道会なんかで――そんなものは、そうだな二か月か三か月経つとダメになっちゃう。三日坊主なんてのもあるけれども。そういうことはもう当てにならない。自分の信仰も当てになりません。自分の愛も当てになりません。当てになるものは一つありません。だから、

「憐れみ給え」

なんだよ。この「憐れみ給え」ということが本当^{はらわた}に腸の底から言える人が今度は、

「わが心定まれり」

になるんです。だから、この詩篇はそうなっているじゃないですか。ちゃんと一人の人が言っているんだよ。

「不動なのはあなただけです。あなたの中に私が入れば、

入ればではない、もう入れられているから、

あなたの本願の効力にとっつかまりましたから、私の心はちつとも定まらないんだけれども、今度は本当に定まりましたよ」

と。逆説ですよ。これが「わが心定まれり」の本当の言葉、本当の気持です。私は生きのいい青年が、

「もう、先生、決意しました」

なんてのは当てにしないんだよな。そんなものは、まあ10年くらい当てにしない(笑)。集会に10年くらい食いついていなければ。私はとにかく20歳の時に信仰に入つて、これで50年。



まあこれで私は「わが心定まれり」と言っても、悪くないようですが(笑)。それは福音から離れるわけにいかんもの。福音から離れたらもう行き所がないもの、この福音から。

「御霊を中心にしたこの福音から離れてどこへ行けるか! キリストの御霊は全世界の何ものとも代えることができない」

と私ははつきり言います、誰が何と言おうと。私にとっては、御霊はそうなんだ。そういう、「わが心定まれり」ということ。

「二筋に心定めよ浜千鳥いづこの浜も波風ぞ立つ」

という歌があるね。どこの浜も波風が立つから、あっちへ行こうこっちへ行こうと、うろたえるなよと。運命環境はいろいろに変わる。また自分自身の内面の世界も、信仰も心も定まらない。だから、諸行無常というわけだ。万事流転する、「パンタ・レイ」という。運命環境も動いたり、天気だつてそうだなものな、晴れたり曇ったり、雨が降ったり風が吹いたり、暗くなったり明るくなったり、まあいろいろですわ。自分の身体の調子もそうだ。心の具合もそうだ。定まらないものばかりじゃないですか。

『わが心定まれり』とは、なにウソをつくか

と。定まらないものばかりだから、「わが心定まれり」ということは非常に逆説的な表現であつて、この自分の心がいかに当てにならないかということに本当に分ったやつが、

「もう、あなたでなければ、私はやり切れない」

という告白をするときに、「わが心定まれり」と言えるんです。自分が当てにならないから、「定まりました」という。

「自分が当てにならないから、本当に定められました」ということ。

「あなたの本願が」

と、キリストはそれで貫いた。神さまの御意で貫いた。そうすると、その不動心における実存そのものは、千変万化、自由自在。

「あの野郎、ちつとも定まっていけないか」

と。そうじゃないんです。本当に定まっているやつは非常に自由自在なんです。カントさんみたいに、時計で動いているような、そんなのとは違うんです、時計みたいに動くのと。なにもカントの悪口言っているんじゃない。カントは哲学者だから、あれはあれでいいよ。そういうのが、「わが心定まれり」という本当の気合であることが分りましたね。

「汝の心、不動なるが故に、わが心定まれり」

と言える。わが心はちつとも定まっていない。

「汝の心が我が心を定め給えり。定め給わったところの我が心は自由自在なり」

と。これが「わが心定まれり」。それはどういふことかというところ、



「福音のためには、また福音にあつては、私は絶対に動きませんぞ」

と。どんなに現実の私がダメでも、「どっこい」という人間ですよ、達磨さんみたいに――今日、私はダルマさんを買って来たんだけど――必ずこのダルマは立つようになる。磁石のように必ず北を指す、どんなに揺れているようにみえても。

「なるほど動の不動だなあ」

と。動の不動という――今日初めて言ったな――しょっちゅう動いている、揺れている。動中の不動という。動中の静、静中の動という言葉があるが、動の不動なんだよな。非常に弾力性があるんです。

それで、福音、ただ福音のみ。何をしていてもいい。職業はどう変つてもいいよ、そんなことは。けれども、貫いているものがある。

「私は福音に生きている。御霊が無ければ、私の生命はない。私が生きてござるのはキリストの御霊がわが中に来たり給うがゆえに。主さま！と言えば直ちに、その世界に入っているがゆえに」

と、これははつきり言える。これがこの

「わが心定まれり」

ということですよ。いいね、楽に言えるんですよ。

「さて、『わが心定まれり』とは、どうだろうな、言えるだろうか？」

「言えるだろうか？」なんて言っているうちは、いつまでたつても、言えないんです。「言えない」ということにはつきり分かつて、もう自分を投げ出しているやつが「定まっている」やつなんです。自分を当てにしないやつが「定まっている」やつ。キリストで動くんです、いつも。躓いても転んでも。

「あれは躓いたり転んだりしているじゃないか。こっちの人間は実に立派じゃないか。どっちが定まっているのだろう？」

と。躓いたり転んだりしているやつの方が定まっている。本当ですよ。立派なやつが、ある所に来ると、どうにもなくなつて、ダメになつてしまう。ところが、躓いたり転んだりしているようなやつが、どっこい中心があるんだよな。そいつがいつも前進しているんだ。福音の世界はそうです。そして、前進して行く。何か知らんけれども、天来のものが光っているんだ、その人を通して。磁石みたいなやつが、霊気が漂っているんだ、中に。これが「わが心定まれり」ということ。

ヤケクソになつてごらんない、定まるから。ヤケクソになると、なるほど定まっている。あきらめではないよ、あきらめはダメだよ。

「何か知らんけれども、今日は図太い線が自分の中に出来ました」

と言ったら、万才だよ、それなら。そのためにこの集会をやっているんだから。

「もう、下らないことを考えるのをよしました」



と。それでわが心定まっているじゃないですか。
「もう、どうでもいいですよ」
と。はい、それでいいんです。……

●キリスト一点張り

7 わが心さだまれり

神よわがこころ定まれり

われ謳いまつらん 頌えまつらん

本当にそうです。それはもう、「謳いまつらん 頌えまつらん」という境地になっているから、「定まれり」と自然に出てくるんです。

「もう、こつちはどうでもいいんです。あなただけが私はうれしくって、たまらないんです。あなただけが私の一切なんです」

と。キリスト一点張りで生きなさいよ。そうしたら、「わが心定まれり」と、そんなこと言わなくなっているよ、黙っていて結構だ。

「あの野郎、定まっているなあ」

と、よその人が言ってくれるよ。だから、この詩篇は少しまだダメだよ、こんなこと言っているうちは(笑)。このところを白紙にして、

「何だろうなこの白紙は？」

なんて。「神よ」なんて言って黙ってしまつてね(笑)。そして、

「われ謳いまつらん 頌えまつらん」

と。その間に一体何があるかと。そして、「わが心定まれり」と書いたら、それは百点満点。少し印刷がボケている方がおもしろいね(笑)。そういうわけです。

まあこんな聖書の解釈するやつがいますか、いったい世の中に。しょうがないですよ、私は御霊に自由に導かれてやつてるんだから。

8 わが栄よさめよ 箏よ琴よさめよ

おもしろいね、これ。相手は物ですよ。物に向かって「さめよ！」と言っている。物でもそれから自然でも、みんな生きているもののように取り扱って、ヘブライ人というのは非常に生命的だよな。自動車を運転するやつは、「自動車よ！」と言つてかわいがつてやれ。なでてやれ、馬をなでるように。

「わが栄えよ」とは、何ですか。神さまはわが栄え、キリストはわが栄えです。もう一つ言うよ。「われという栄え」なんです。神さまは、キリストは我を彼の栄光にしていってくださるんです。

「我はキリストの栄光体なり」

と。いいですか、皆さん。聖霊が来ている人は、キリストが栄光体にしていらっしゃるん



です。

「おまえを通してわが真理を現すぞ」

と。その時、私たちはキリストの栄光体です。だから、パウロが言っているじゃないですか。

「栄光より栄光に至りてついにキリストの姿に化するなり」

と。だから、「我という栄えよ」ということなんだ、「わが栄」というのは。我それ自身が栄え、神さまの栄えなんだ。自分の栄えじゃないよ。だから、躓くんだよ、こういう言葉は。

「わが栄えとはどんなものか、金鷄勲章きんしでも貰ったんでしょか」

なんて。この頃は文化勲章をたくさん貰っている。私は70になったって貰わないんだ(笑)。奥田先生あたりは来るよ。奥田先生あたりは70になると、ちゃんと何とか瑞宝章なんてのが。私はよほど怠け者だもんだから、

「あんな野郎には何もやらない」

と。それでいいんだ、不名誉教授だから。奥田先生はそんなものが来たって問題にしない。そんなので喜んだら、奥田先生に喝をやっちゃう(笑)。

「それはご遠慮いたします」

なんて――まあ余計なこと言う必要はない――私はあなた方は親しいから勝手なことを言うてるんだけど。

●われ黎明を呼びさまさん

「わが栄えよ」というのは本当にそういうことです。

8 わが栄えよさめよそう箏よそう琴よさめよわれ黎明しのめをよびさまさん

これは素晴らしい言葉だね。我々は黎明に呼び醒まされているんだ、普段。今日だって明るくなつてくると、ここは雨戸がないから、6時頃から目が覚める。寝坊はできないようになつている(笑)。まあ半分冗談ですが。

そういうわけで、黎明に覚まされるわけです、我々は。昔の人はお天道さんが昇ってくれば目が覚めて、お天道さんが沈めば寝る。原始人はそうだよな。この頃はみな夜行族だけれども。だから、文明人は長生きできないんだよね、自然の法則に反するから。ところが今度は逆に、

「われ黎明しのめを呼びさまさん」

というんだから大変なもんですよ。どういうことですか？

「もう私はうれしくてたまらない。だから、早く朝になれ。黎明をこつちから呼び醒まして讚美しようじゃないか。お天道さん、早く出てこい。太陽よ、東より早く出でよ」

と、そういう気持ですよ、喜びの余りのね。夜が明けるのが待ち遠しいんだ。

「わがたましいは衛士えじがあしたを待つにまざり」



なんて、詩篇130篇にあるけれども、そのように、

「黎明を呼び醒ますまでに、自分は神さまの光でもって、栄光でもって、光っているから、こっちの光でもって向こうの光をさそい出してやろう」

と、それくらいの気持です、靈光があるからこっちには。黙示録にあるじゃないですか、

「キリストはエルサレムの、神の都の光で、燈火であって、日月の照らすを要せず、

月も日も要らん。キリストが光だぞ」

と書いてある。黙示録のああいふ言葉は物凄いですよ。神の光の世界に入ったら、我々は――相対的人間というものは太陽の光で光ということを認識するけれども――そいつを超えてしまうわけです。冥想の世界で靈光を、キラキラと光るのを見る。その光は物凄いことになるからね。エゼキエルなんていう預言者がそういうのをよく見ているんだ。エゼキエル書に出てるでしょ。黙示録もそうだ。とても眩^{まぶ}しくてしようがない、キリストは。それはサンダーシングあたりはみんなそれをやっている。だから、

「われ黎明^{しののめ}を呼びさまさん」

とはなんと熾^{さか}んなる靈的な光の、「汝らは世の光」というキリストの光、神の光の人の叫ぶような言葉です。その気合をもってこれを読んでいかないと。

もう詩篇なんていったって、御霊がくればみんな読めてしまう。もう註解書なんて私は面倒くさくしてようがないんだ、この頃。あんなのを読んでいると、却って塞^{ふさ}がってしまう、雲がかかってしまう(笑)。本当ですよ。だから、

「聖書は聖書をもつて註解せよ」

という。聖書だけよく読んでいると、もうあちらこちらの聖書の言葉がピンピン響いてくるわけだ。

聖書くらい楽しい本はない。マンガをみんな読んでいるけれども、ダメだよ。聖書くらい楽しいものはない。論より証拠、私の聖書を見せてやるから。ちゃんとこういうように切つてある。これ十二小預言書だからね。バラバラにしてちゃんとホチキスでとめてある。こういうようなのを時々、ポケットに入れて読んでいる。もうマタイ伝なんてのは頁がどこかへ行ってしまったって、昨日も学校の講義でもって開こうと思ったら、頁がなかったなんて(笑)。生徒が笑っていたけれども。

「お前たち、これを見てみる。もうバラバラで、どれくらい読んだと思うか」というわけだね。

●キリストだけが当てになる

9 主よわれもろもろの民のなかにてなんじに感謝し

もろもろの国のなかにて汝をほめうたわん

まあこれは詩篇的な、祭司的な言葉です。



10 そは汝のあわれみは大いにして天にまでいたり
というのは、天の極にまでいたり、

なんじの眞実^{まこと}は雲にまでいたる
雲のゆくすえ、天のはてまで汝のいくつしみと眞実とは限りなく遍満するのである。さつきの、

「神はその憐憫^{あわれみ}その眞実^{まこと}をおくりたまわん」

というのに応ずる言葉です、10節は。

10 そは汝のあわれみは大いにして天にまでいたり

なんじの眞実^{まこと}は雲にまでいたる

非常にヘブライ語というのは対句で漢文みたいに言う。神さま、キリストの愛、キリストの信、義、これは私たちにとつては、天地を貫いて遍満している。いずこに行つてもこれにぶつかる。だから、さつきの、

「5 神よねがわくはみずからを天よりも高くし

みさかえを全地のうえに挙げたまえ」

とあるけれども、

「みさかえを全地に浸透したまえ」

と言つた方がなおいいくらいです。高きと低きと両方に来なくてはいけないんだ、本当は。本当に高いものは本当にどん底に来る。キリストという霊止^{ひと}はそういうひとなんです。上がりつぱなしではダメ。本当の中道は右と左をちゃんと持つている。そういうような、

「キリストの愛のいかに高く、深く、長く、幅があつて限らないか」

なんて、パウロがエペソ書かどこかで言っている。

11 神よねがわくは自からを天よりも高くし

みさかえ^{みさかえ}をあまねく地のうえに挙げたまえ

これは繰り返しの言葉ですね。

この詩篇57篇はとにかくそういった運命環境の、非常に自分が追われて危険的な、ある意味において終末的な存在にありながら、本当に

「自分自身がどうにもならない」

といって、内憂外患というわけだ。それで、

「あわれみたまえ」

と本当に訴がる。しかしながら、神さまはこのようなものを通して、

「必ず成し遂げ給う」

という。自分を当てにしない。環境を当てにしない。運命を当てにしない。

「当てにするものは一つもない。神さまだけが当てだ。キリストだけが当てになる」ということがはつきり分つた時に定まつたんです。定まらざる心が本当に定まつたから、



「そんなにお前は私を当てにしているか。よし、それではお前を通して、やるぞ」というのがこの聖書の世界なんです。

「お前は自分が当てになるか。では、自分でやれよ」

なんて言われたら、お終いなんだ。おしまいだよ、それ。それだけしかない。相対的なこととおしまい。そうすると、どこかで行き詰まり、お終い。もう人生はつきりしているんです。

どうぞ、皆さん、もうどんなに地上は失敗のように見えようが、悲しみのように見えようが、苦しみのように見えようが、「どっこい！」と、その患難の中に、患難を通して、その中にこそ、物凄いのものがやってくる。これがパウロがああ多くの患難を通して――パウロくらい多くの患難は誰がやったかと思うですね――ひどい目に合ったよ、正直。何度も死にそうになった。けれども、彼は牢屋につながれても、なお

「喜べ、喜べ」

と、キリストの生命があればほど熾^{さか}んじやないですか。こないだ書いた、ローマ書8章の後半のところ、あの熾^{さか}んなこと。「註：ハレルヤ35号」（1974年4月）、「キリスト者の信望愛」（ロマ書第8章）、第6回春期福音特別集会（1974年3月23～24日、伊豆高原浮山荘にて）

「このキリストの愛から私たちが何ものが離すことができるか」

と。それはもう御霊の叫びです。自分の側の信仰とか何とか、そんなことではない。本当に御霊に貫かれる。恵みとは何か。絶対恩寵とは何か。御霊それ自身です。

「神―キリスト―聖霊―我」

というものが貫いて来るんです。内住の関係、一つの関係、一如の世界。「汝と我」なんて言っているうちに、

「我が汝だか、汝が我だか分からなくなる世界」

それが本当ですよ。親しい本当の親友というのは、

「お前が俺か、俺がお前か、どっちがどっちだったか」

なんてね、それくらいの間柄ですよ。

●キリストは最善を成し給う

だから、キリストは、

「我を見し者は父を見し者なり」

と言う。

「我は何もできない」

と、キリストがそう言ったんだ。何もできないから、何でも出来てしまった。行き詰まりを知らないではないですか。何が行き詰まらせるんですか？ こんなキリストの御霊をいただいて、我々を行き詰まらせるものが何かあるんですか？ いいじゃないですか、どう



なっただって。それはもう最善のことが成ってくるんです。その最善が何が最善だか、そんなことは人には分からない。自分にも分からなくてもいいよ。

「キリストは最善を成し給う」

と。これが絶対の信。御利益的な信仰とおよそちがう。

それでもちろん現象的に祈りが聴かれることは有ります。結構です。しかし、聴かれないこともあります。けれども、聴かれようが聴かれまいが、一番深い意味においては、全部聴かれているんです、全部。祈り以上のことが聴かれている。それは神さまの愛の意志だから。だから、心が本当に定まったんです。

「何か、こういうことでなければ、私は……」

なんて言っているうちはまだ定まらないです。

「どうなっただっていいんだ。最善になるんだ」

と。

「勇者にとって最悪は最善なり」

と、ブランニングが言ったではないですか。「勇者」とは何か。自分を本当に弱者にして、神さま、キリストを一切としている者が勇者なんだ。それは一人の乙女でもそうです。

「私は女の子でも勇気がありません」

なんて、何を言いなさるか。ジャンヌ・ダルクを見てごらん。あなた方はジャンヌ・ダルク以上の女性なんだ。内面的にはそうである。何も剣をとらなくてもいいよ。英軍をやっつけなくたっていい。御霊の世界は、無条件に来ようとしているのに、それを遠慮するぐらい馬鹿げたことはない。どうせ、人生いくら長くたって百年ですよ。それならば、相対的な事を問題としないで、絶対的なものを受けとって行こうではないですか。パウロが、

「キリストを持つ者は一切に勝っている。誰か我らに勝ち得んや」

ということとは、

「相手を全部救い上げるぞ」

というわけです。

「敵を愛せよ!」

「はい、愛します。愛せます!」

と、はつきり言える。

「敵を救うことの、荷うことのできないやつはキリストを受けとってない」

ということだよ。人の嫌がることを喜んでやる。それはキリストの力がくるから。

「私は少し損したなあ」

なんて、すぐ計算する。あのマルタみたいに。マルタは一生懸命にやっていたら良かったんだけれどもさ、

「マリヤは聞いてばかりいますが、どうにかしてください」



なんて。ある時は本当にマリヤになり、ある時には本当のマルタになる。マリヤ、マルタどっちにでもなる。

「貴女の名前は何て言うんですか」

「マリヤ・マルタと申します」

そう答えたら、その女性は本ものだ。「マリヤです」とか、「マルタです」というのは、私は50点しかやらないよ、そんなのは(笑)、まあしょうがないね。キリストは、

「あの小池なんてやつは、何と私の言うことを勝手に解釈するか。よし、勝手にやらない。それが本当だ」

と仰ってください。それはそうですよ。

「夕あり、朝あり。これ初めの日なり」

という。昼があり、夜がある。静があり、動がある。男があり、女がある。みんな真理は両面を持っているんです。両面を渾然として持っているやつが本ものなんです。永遠の女性と永遠の男性の両方を持っている一人の人間は永遠の人間なんだ。

私の血液はA B型だから両方持っている。これは冗談です(笑)。どうも時々冗談がまじって申し訳ない。血液型はどうでも、そんなことを心配しなくていい。キリストの霊血を頂いていれば、血液型なんか問題じゃないですから。

だから、本当に無色透明な人は無限色を持っている。太陽の光のごとく。こういう光にも自在に光る。女の人がダイヤモンドが好きなのは、いろんな色に光るからだよね。ダイヤモンドが好きだったら、なぜ自分の魂をダイヤモンドにしないんですか。自分の魂がダイヤモンドになって、自在に光ってごらん。あんな小さな何とかカラットなんて、世界第一のカラットだって大したことない。

「私はダイヤモンドは有りませんが、私の胸の中のダイヤモンドが見えませんか」という女性になってください。本当ですよ。まあダイヤモンドを付けたっていいよ。何もケチつけているんじゃない。

「これは私の胸の中のダイヤモンドの象徴です」

と言ってくれよ(笑)。

そういうわけで、私に言わせると、何とでも答えちゃうです。それは自在の世界だものね。ちゃんと中心があつて、グルグル回転しているから。台風の目みたいなもんでね。台風の目は静だけれども、物凄い力でもってグワーツと動かしっているから。

いっぺん台風みたいなものに、聖霊の台風にぶつかつたらいい。台風のあとはカラツと空がはれる。我々の信仰も、聖霊の台風にぶつかつて、引っくり返されなければ、あのカラツとした世界になかなか入れないんだよね。まあ微風でもいいよ、無風でも。とにかく、入ってください。おわります。

